

# 「敵を赦し、憎しむ者に愛を」

## ジュアン ロムアルドウス 神父

皆さん、復活祭を迎える心の準備として、「敵を赦し、憎しむ者に愛を」を共に黙想する、このテーマを今回の巻頭言で分かち合いたいと思います。なぜかという、キリスト者はイエスの十字架と復活から無条件の愛を学び、互いに許し合って、心から兄弟姉妹たちにこの愛と許しのメッセージを告げ知らせることができるという、一番大切な生き方とミッションを与えられているからです。

まず、人間関係において、一番難しいことの一つは、「人を赦すこと」です。自分と相手の間に何かトラブルや問題が起こった時、ただの、「ごめんなさい」とか、「すみません」という一言だけでも、なかなか言えない時があります。あるいは、言えるようになるまで、時間がかかると思います。場合によっては、どうしても相手を「ゆるせない」という厳しい時もあります。その時、相手のことは、「嫌だ」ということだけではなく、むしろ、「邪魔な刺とか悪性ガン」のようなもので、関係を切り離したいくらいです。自分にとって、相手との関係を削除すれば人生はもっと落ちつき、より幸せになると思っているからです。しかし、深く考えて見れば、人生において、どんなに楽しいことがあっても、そこに、「ゆるせない人」がいるなら、心が暗くなっていきます。なぜなら、心の傷がまだ残っているからです。つまり、その方法は傷を「包む」ためだけであり、傷を「癒す」ためではないからです。さらに、その心の傷や恨みが残り続けると、今度は自分の心だけではなく、精神的なエネルギーを消耗し、人生はより重く感じるようになります。ですから、心の傷が完全に癒されるために、何よりも、「相手を誠実に赦すこと」が重要です。つまり、「赦す」とは、単に今まで認められなかった相手の行動を認めるようになるという意味ではなく、また、人を傷つけるような行為も認めるという意味でもないのです。むしろ、自分の心の中にある「ゆるせない」という否定的な考え方の視点を転換することが大切です。

まだ、覚えているかもしれませんが、年間第七日曜日の福音に主イエスは、「あなたがたに言うておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしろ。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい(ルカ福音6:27-29)」と弟子たちに教えられました。実に、主イエスは、ご自身でそのように教えられたばかりでなく、自らそれを実践され、模範を残されたのです。イエスは、十字架上に付けられた時、ご自分を殺そうとしている人々に向かって、「父よ、彼らを赦してください。彼らは何をしているか、自分たちでもわからない」と祈られました。言い換えれば、主イエスは、自分を苦しめる人に向かって、「あなたを愛しています。あなたを赦します。あなたの救いを祈ります」という恵みのみ言葉を

かけられたのです。もちろん、ここで、キリストご自身が、「その兵士たちの行為を認めることとか、  
なかったようにした」という意味ではなく、むしろ、相手の心や魂を磨くため、また、相手が回心し  
て救われるようにと祈られたのです。これこそが、「無条件の愛です」。痛みや苦しみの中で、どう  
しても相手を救いたいという「真の愛」です。キリストは、人間の心に持つ罪を憎んでも、その人を  
憎むことはなさいませんでした。心から愛されたのです。

皆さん、人を赦すことは、自分のためにできる最高のことでもあります。簡単なことではないし、  
時間がかかることもあります。赦すことができたとしても幸せになります。自分をいやすために  
必要であれば、あらゆる感情を手放し、重荷を降ろしましょう  
「赦し」とは、「踏みつけられた花から出る、良い香りのようなものだ」とある人が言いました。私達  
が人生の中で、もし、本当に人を赦すことが出来るなら、お互いの間は、どんなにうるわしいもの  
となっていくのでしょうか。

上記のように、主イエスが、「無条件の赦しと真の愛」をお示しになったのは、神殿とか裁判所か  
らではなく、「十字架の上」からです。「痛みや苦しみ」の所からです。どうか、私たち自身も厳しい  
状況におかれた時、心の痛みや苦しみから、愛を持って、相手を赦すことができますように。相手  
を赦せるなら、相手のためだけではなく、自分自身も癒されて、救われるからです。

皆さん、「赦し」は、「苦しい...」しかし「美しい...」

「心が痛い...」しかし、それこそが、「真の愛...」

「是非、互いに赦し合いましょう...」アーメン。